二十世紀末に生きる ボヘミアン画家の素顔

Takashi Fujitani

Painter

戦前までの日本には、高等遊民やボヘミアンと称された生活のためにあくせく働くことなく日々を過ごし、芸術のために生きる一群の人間がいた。戦後、社会のシステムが堅牢になるにしたがい日本は苛烈な競争社会へと変貌を遂げ、実用的、効率的でない人間は社会の落伍者の烙印を押され、排除されるようになってしまった。つまり、現代ほどボヘミアン的生き方を志向する人間が生きにくい時代はないといって良い。

北白川の住宅街の片隅にひっそりと建つ古風な洋風下宿、銀月アパートーそこは一部で〝京都のチェルシーホテル〟と呼ばれ、多くの若きアーティストやミュージシャンたちが下宿している――の一室に、画家・冨士谷隆さんのアトリエはある。室内には100号キャンバスに描かれた抽象画から、18歳の頃より描き始めたペン画、板絵まで多彩な画材と技法で描かれた作品が所狭しと飾られている。が、そこには混沌とした雰囲気は一切無く、むしろすがすがしいまでのシンプリシティーが部屋じゅうを支配していた。

大阪の下町で生まれ育った冨士谷さんは、地元の高校を卒業した後は約7年間のフリーター生活を経験する。経験したバイトの種類もタコ焼き屋、TVや映画のエキストラ、京都ロケにやって来た芸能人の付き人など、実に様々。その間、焦りや劣等感は感じなかったという。「小さい頃から画家になるんやと決めてましたので、フリーター生活もそんなに苦ではなかったですね。いつかはきっとなれるものやと信じていましたから」。以前より山下清や寅さんの生き方に憧れていたこともあって、フリーター生活は憧れの人と同じに世界に身を置けるという喜びの方が先に立ったそうだ。そんな時代に、大阪の最も庶民的な風景や人間像を、0.1ミリのロットリングを更に削って描いた。腹巻にステテコ姿のおっちゃんや不精髭を生やした労務者が、ひなびた酒場が建ち並ぶ下町をうろつくといった風景は、実際本物を見れば恐い印象を与えるだろう。しかし彼の手にかかれば、それはほのぼのとした牧歌的風景になってしまう。「例えばドキュメンタリー写真のように労務者のおっちゃんや彼らが暮らす街を表現したら、街が持っている暗くシリアスな面ばかりが強調されてしまう。でも僕が見る限りでは、おっちゃんたちはいつも怒っているわけやないし、嬉しいことがあれば笑いもする。そんな下町の陽気な部分を僕なりに描きたかったんです」。画面から滲み出る温かさは、地元で永年暮らした者のみ持つ共感の眼差しから来ているといえよう。それほどまでに、彼のペン画は優しさにあふれている。

25歳の時に一念発起して、京都芸術短期の美学美術史科に入学。古今東西のあらゆる名作を観たり、ヨーロッパ、中近東、ニューヨークなどの美術館を駆け足で巡ったりと勉強三昧の日々を過ごすが、卒業後は再びフリーター生活に。ところが、付き人のアルバイトで女優の藤真利子さんと出会い、人付き合いの大切さやプロとして仕事をしていくことの厳しさを教えられ、その刺激から本格的に油絵に挑戦し始めた。「その頃から、色や構図の勉強を兼ねて抽象画を描きはじめたんです。でも出来た作品を発表するにもギャラリーを借りるだけの金が無い。そこで二科会に出品してみたんです。あそこは歴史がある割に芸能人が出品できたりと、比較的自由な雰囲気だったので選びました。運良く入選しますと京都の他、他の地方の方々にも僕の絵を観てもらえますしね。で、二年前初めて応募したらいきなり入選ですよ。出品する3ケ月前に初めて油絵の具を手にした僕が。僕は今でも、入選できたのは藤さんとの出会いがあったからだと思っているんです」。その言葉には、二年連続入選に加え、今年は奨励賞を受賞したことに対する驕りは無い。実に淡々とした口調で、彼は自分の画家としての資質をこう語った。「僕は古いタイプの画家のように、あちこちの展覧会に出品して少しづつ名前を覚えてもらう方が性に合っている。抽象画も始めたばかりですし、スケッチ旅行をしたり、下町をモチーフにした世界も大切にしたい。まだまだ絵に関しては勉強したいことばかりです」。

メジャーになることに血道をあげることなく、自然体で創作し続ける冨士谷さん。彼の内ではまだ、古き良き時代のボヘミアン魂は健在だ。

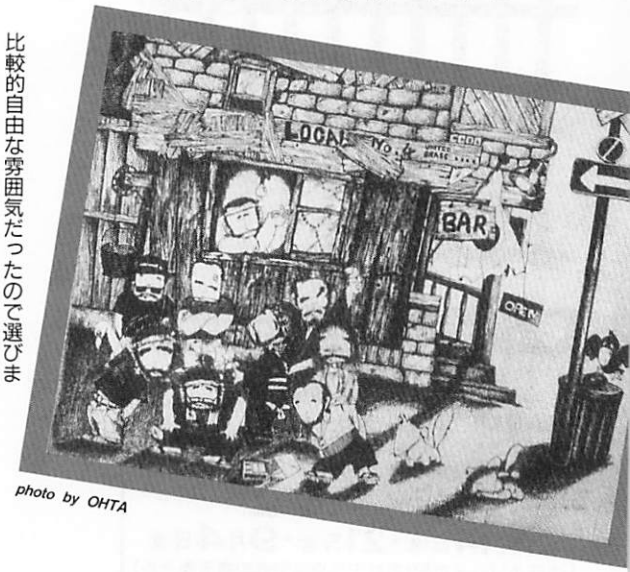
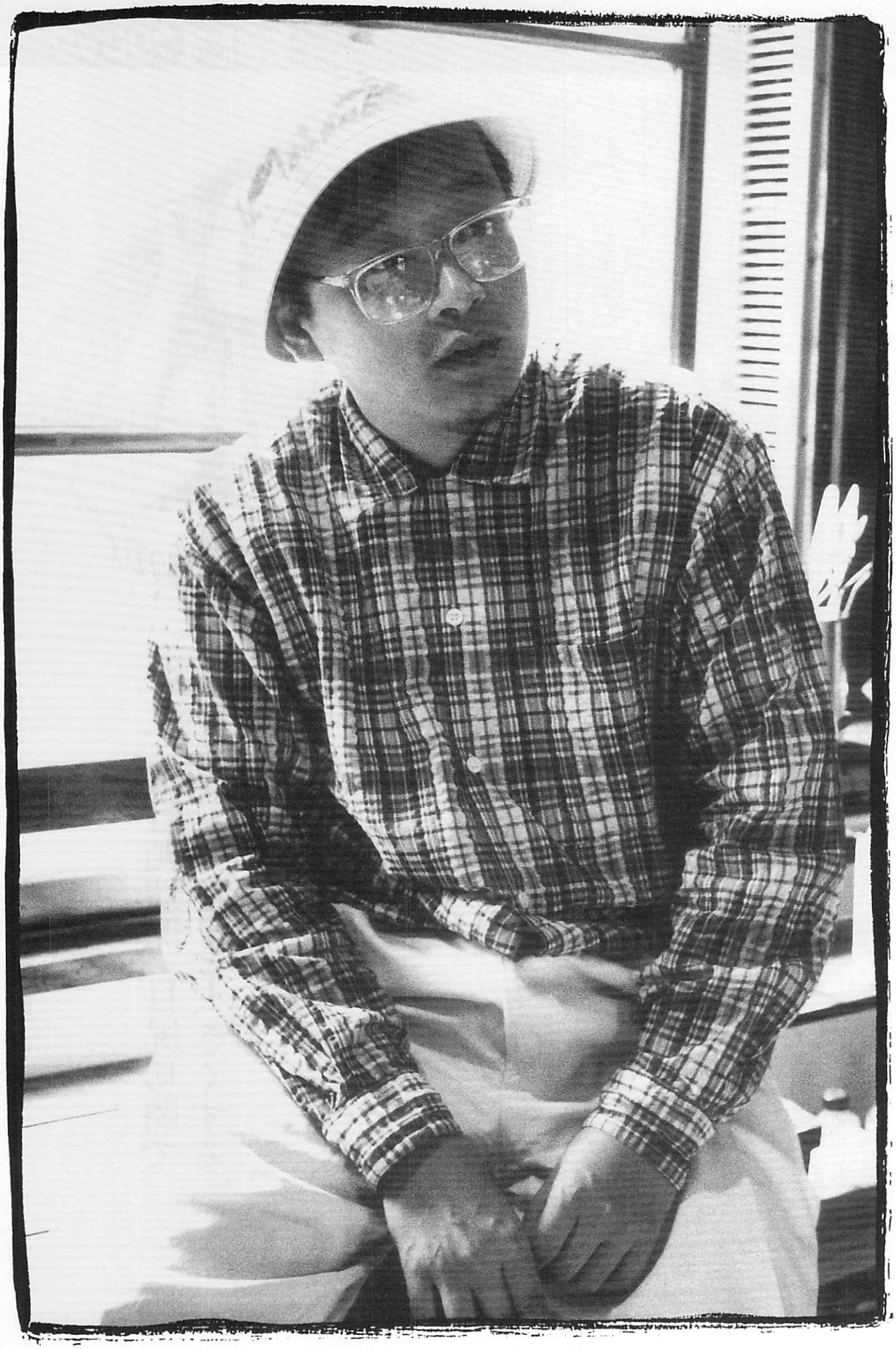


photo by OHTA

抽象絵画から下町スケッチまで自然体で描く洋画界の〝フーテンの寅〟

冨士谷　隆

BORN TO 1960

1960年、大阪の天下茶屋生まれ。京都芸術短期大学美学美術史科卒。タコ焼き屋、映画、TVのエキストラ、付き人、デザイナーなど様々なバイトを経た後、'90年二科展入選。'92年には奨励賞を受賞。油彩で抽象絵画を描く他、超極細ロットリングで下町風情も描く。趣味はスケッチ旅行と散歩。左京区在住。